

基本構想

平成29年度～平成37年度

KAMEYAMA

1. 亀山市のこれまでと未来への展望

亀山市の将来の姿を描くためには、長い歴史を積み重ねながら形作られてきた「亀山らしさ」を、市民をはじめ、亀山市に関わる人々が共有することが大切です。

この「亀山らしさ」を踏まえ、将来を見据えた課題を意識しながら未来を展望し、目指すべき姿である「将来都市像」を描きます。

そのために、亀山市の「将来都市像」を描く前に、まずは亀山市のこれまでと未来への展望を整理します。

(1) 亀山市の生い立ち

亀山市は、わが国の中央部、中部と近畿の結節点に位置する三重県の中北部の都市です。中部と近畿の中心都市である名古屋市や大阪市とも近接していることから、生活・文化・経済など多方面での関わりを持っています。

市内を見ると、西方に鈴鹿山脈を擁し、そこを水源とする鈴鹿川などの河川が市域を西から東に流れる自然豊かな都市です。

■ 都市と自然との調和を生み出した亀山市の地形

市域のどこからでも望むことのできる鈴鹿山脈の山並みは、亀山市の象徴であるとともに、市民の暮らしの中でとても身近な存在です。

一方、鈴鹿川をはじめとする河川が開いた土地には、集落が形成されるとともに、流域で展開される農業を支えてきました。

こうした鈴鹿の山並みと河川が長い年月をかけて作り出してきた起伏の多い河岸段丘の地形は、亀山市の都市形成に大きな影響を与え、過度な市街化が自然な形で抑制される中で、必要な都市機能が集積してきました。

このような、暮らしの中に溶け込んでいる水や緑などの豊かな自然は、亀山市の原風景であるとともに、『ふるさと・亀山』の想いの源泉ともなり得るものです。

■ 「道」に彩られた亀山市の歴史

亀山市は、わが国の東西を結ぶ地域にあり、伊勢への分岐点でもあることから、いつの時代にあっても「道」がキーワードとなり、その歴史が彩られてきました。

古代においては、都を守るために設けられた古代三関の一つである鈴鹿関があり、壬申の乱では大海人皇子が加太を越えてこの地域を通ったと伝えられています。

近世においては、東海道の宿駅が整備された亀山・関・坂下の三宿を中心に、にぎわいと交流が生まれました。当時のまちなみを現代へと残す関宿や亀山城多門櫓などの歴史資産は、歴史的風致を生かす亀山市のまちづくりの基軸となっています。

近代になると、東海道に沿うように鉄道が整備され、関西本線と紀勢本線の結節点である亀山駅を中心に、井田川・下庄・関・加太の5つの駅が市内に置かれました。中でも亀山駅には、国鉄の亀山機関区が置かれるなど、鉄道のまちとして発展してきました。

そして、現代においては、東名阪自動車道、新名神高速道路、伊勢自動車道などの高速道路のジャンクションが整備され、国道1号・25号などの広域幹線道路との結節点となるなど道路交通の要衝となっています。

このように、時代の発展とともに様々な変化を遂げながらも、交通の要衝であり続けたことは、亀山市の歴史を見る上で、最も大きな特徴です。

こうした交通拠点性を礎に、にぎわいと交流と、時代に応じた産業の集積による内陸型工業都市としての発展が、亀山市の活気へとつながってきました。

(2) 亀山市の今

亀山市は、平成17年1月11日に旧亀山市及び旧関町の合併により誕生しました。

その後、亀山市・関町合併協議会において策定した新市建設計画を発展させた第1次亀山市総合計画に基づき、市民参画のもとまちづくりを進めながら、新市の一体感の醸成を図ってきました。

合併の背景には、人口減少や少子高齢化といった社会情勢の変化などもありましたが、亀山市では、平成22年の国勢調査において初めて総人口5万人を突破し、名実ともに「市」の仲間入りする都市へと成長してきました。

一方、この総人口5万人の都市規模には、小さいながらも市民と市民とのつながりや地域の絆が残され、市民一人ひとりと行政の距離も近く、お互いに「顔が見える規模」にあります。こうした中、平成22年4月に「亀山市まちづくり基本条例^{※1}」を施行し、市民や地域と手を取り合いながら、まちづくりを進める考え方を明らかにし、様々な取り組みを進めてきました。

■ 地域の絆と活発な市民活動

高齢化が進展するにつれて地域の人と人との支え合いの重要性が見直される中、亀山市の各地域では、都会では途絶えがちな古くからの人となりのつながりが色濃く残されています。こうした中、地域に関わる多様な主体が参画した地域まちづくり協議会が市内全域に設立され、地域の主体的なまちづくり活動が加速されています。

一方、市民活動においても、以前から協働事業提案制度^{※2}などの支援制度を活用し、様々な市民活動が展開されるとともに、平成25年度からは新たに市民活動応援制度^{※3}をスタートさせ、市民活動の更なる活性化が図られています。

■ 「学び」と「子育て」を大切にしまち

亀山市は歴史的に「学び」を大切にしてきたまちです。江戸時代には藩校・明倫舎が置かれるとともに、寺子屋でも熱心な教育が行われていました。また、明治時代には、三重県女子師範学校が開校されるなど、古くから教育に対する熱心な地域性があります。近年においても、個の学び支援事業や少人数教育推進事業などに積極的に取り組んでいます。

さらに、県下に先駆けて小中学生の医療費の無料化に取り組むなどの積極的な子育て支援や子ども総合センターの設置、また、平成28年度から関認定こども園アスレを開設するなど福祉と教育が一体的に子どもに関する施策に取り組むことで、子育てにやさしいまちとして高い評価を受けています。

※1 市民・市議会・市の執行機関の3者がそれぞれの役割に基づいて、互いを尊重し、協働してまちづくりに取り組むためのそれぞれの権利や責務、亀山市のまちづくりを行う際に誰にも共通な9つのきまり（基本原則）などを定めることによって、「一人ひとりが生き生きと輝き、しあわせに暮らせるまち」を実現することを目的とした条例。

※2 協働事業提案制度は、市民と行政の多様なアイデアを提案する窓口を設置し、事業化できるものは市民と行政が協働で事業化していくための制度。

※3 「市民力・地域力が輝くまちづくり」を進めるための市民参加型の健康、福祉、環境、文化、スポーツ、防犯、防災、子育て、国際交流など、さまざまな分野で社会貢献的活動をしている市民活動団体を、市民が市民活動応援券を用いて応援する制度。

■ 交通の要衝としての利便性と特徴ある都市形成

日々の暮らしを営む上で必要な商業、医療、福祉などの都市機能は、亀山駅周辺の中心的市街地や副次的市街地周辺に一定の集積が図られています。一方、「交通の要衝」としての道路や鉄道の利便性は、名古屋などの大都市や近隣市へと生活圏を広げ、市内で充足できない機能を補完しています。

さらに、亀山市都市マスタープランを策定し計画的な都市づくりを進める中、市道と賀白川線整備により市内道路網の中核となる環状線整備が進むとともに、県と一体的に進める県道亀山関線及び市道野村布気線の整備により、都市の骨格が概ね完成に近づいています。また、歴史的風致維持向上計画に基づく関宿や亀山城多門櫓など本市独自の景観や歴史・文化資源を活かしたまちなみの整備は、暮らしやすさの中に個性のある都市形成にもつながっています。

■ 健康都市への加盟とその後の取り組み

亀山市は平成21年度に健康都市連合^{*1}に加盟し、都市の機能すべてで市民の健康寿命^{*2}を延ばす取り組みへの挑戦を始めました。

また、2025年問題^{*3}に備え、必要性の高まる地域包括ケアシステム^{*4}の構築に向け、多職種間での連携体制の強化を図るとともに、在宅医療連携システム^{*5}を立ち上げました。庁内でも、医療と福祉の連携による地域医療の再構築を図るため、地域医療統括官を設置するなど、住み慣れた地域での健やかな生活を支える体制が整いつつあります。

(3) 将来への見通しと課題

亀山市の将来に向けたまちづくりを進める上では、積み重ねられた歴史を踏まえた今の亀山市を起点に、将来への見通しと課題に向き合い、目指すべき将来都市像を描く必要があります。

■ わが国における社会経済情勢の変化

◎人口減少社会の到来と一億総活躍社会^{*6}の実現

わが国の人口は、1億2,800万人に達した平成20年をピークに、既に人口減少社会に突入しています。国立社会保障・人口問題研究所(以下、「社人研」という。)の推計によると、平成72年には人口が1億人を下回ると見込まれるなど、人口減少は今後、加速していくことが危惧されています。また、平成37年には団塊の世代^{*7}が後期高齢者^{*8}となり、社会保障関係経費などの負担増が見込まれる2025年問題についても大きな課題となっています。こうした人口減少と少子高齢化の進展に真正面から挑み、「希望を生み出す強い経済」、「夢をつむぐ子育て支援」、「安心につながる社会保障」の「新・三本の矢」による「一億総活躍社会」の実現に向けて、政府を挙げての取り組みが進められています。

◎自然災害への危惧と防災意識の高まり

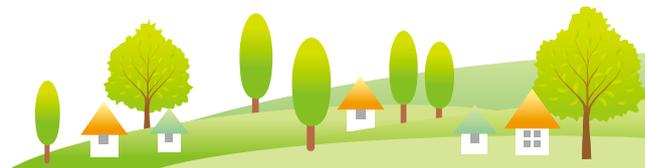
平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、未曾有の被害をもたらすだけでなく、それまでの防災に対する意識を一変させるとともに、人々の価値観をも大きく変化させました。さらに、平成28年4月には熊本地震が発生し、震度5を超える揺れの頻発は、地震への常識を覆しました。このような中、南海トラフ^{*9}に起因する地震の発生が危惧されており、防災・減災の意識と対策の必要性がさらに高まっています。

◎経済環境の変化

わが国の経済は、海外景気の動向などから受けるリスクを抱えながらもリーマンショック^{※10}以降の低迷から緩やかな回復を見せており、こうした経済の好循環を持続的な成長に結びつけるため、政府は民間企業を後押しする成長戦略を打ち出しています。しかし、経済のグローバル化^{※11}に伴う構造変化が進むことから、国際経済が地域経済に与える影響は今後も強くなることが予想されます。さらに、イギリスのEU離脱問題など、国際的な情勢は不安定な要素が多く、こうした環境への的確な対応が必要となっています。

◎スーパー・メガリージョン^{※12}と新たなリンクの形成

リニア中央新幹線は、平成25年に東京・名古屋間の計画決定がなされ、着実に実現に向けた取り組みが進められています。このリニア中央新幹線は東京・名古屋・大阪の三大都市圏がそれぞれの特色を発揮しつつ一体化し、世界最大のスーパー・メガリージョンの形成のために不可欠な存在です。国において財政融資を活用した整備促進を行うこととしたことから、全線開通が最大8年前倒しとなる可能性が生じるなど、スーパー・メガリージョンの創出に向けた動きがさらに加速しています。



- ※1 2003(平成15)年にWHO西太平洋地域で設立された健康都市づくりに取り組む都市間の国際的なネットワークのこと。国際的な協働を通して健康都市の発展のための知識や技術を開発することを目的としている。
- ※2 世界保健機関(WHO)が2000(平成12)年に提唱した指標で、日常的な介護を必要とせず、心身とも自立して暮らすことのできる期間のこと。現在では、単に寿命の延伸だけでなく、健康寿命をいかに延ばすかが課題となっている。
- ※3 日本において、2025(平成37)年に「団塊の世代」の人々がすべて75歳以上になることにより起こる、医療や介護施設が不足するなどの諸問題のこと。
- ※4 2025(平成37)年を目標に、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制のこと。
- ※5 市内の多職種(医師会、歯科医師会、薬剤師会、訪問看護事業所、居宅介護支援事業所など)が連携して在宅医療を実施するしくみまたはその名称。
- ※6 我が国の構造的な問題である少子高齢化に真正面から挑み、「希望を生み出す強い経済」、「夢をつむぐ子育て支援」、「安心につながる社会保障」の「新・三本の矢」の実現を目的とした政策プランのこと。
- ※7 日本において、第一次ベビーブームが起きた時期に生まれた世代。
- ※8 75歳以上の高齢者を指す。
- ※9 四国の南方海底にある深い溝(トラフ)のこと。東海、東南海、南海の3地震が連動して起こる巨大地震の発生が懸念されている。
- ※10 2008(平成20)年にアメリカ合衆国の投資銀行であるリーマン・ブラザーズが経営破綻したことに端を発する世界的な金融危機のこと。
- ※11 国境などを越えて、地球規模で社会的あるいは経済的な影響が及び、変化が引き起こされること。
- ※12 「国土のグランドデザイン2050」の中で示された、リニア中央新幹線によって三大都市圏が結ばれることによって形成される世界最大の都市圏を指す。

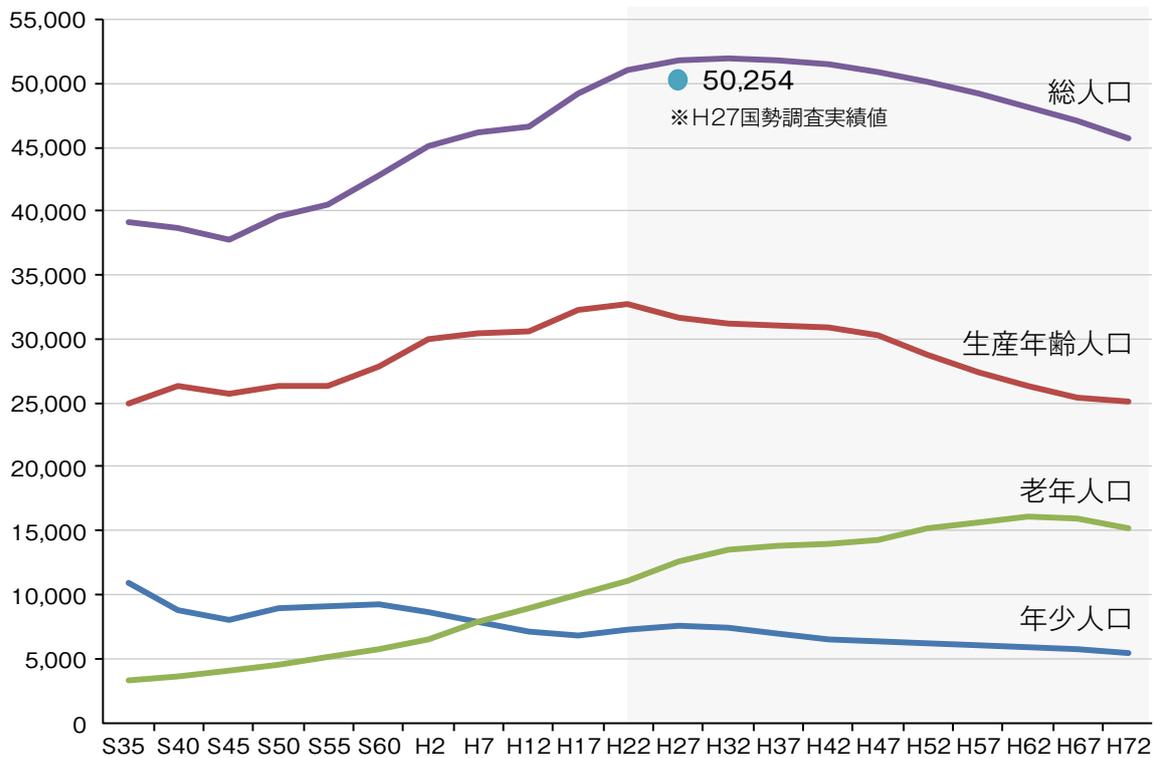
■ 亀山市を取り巻く環境の変化

◎ 亀山市における人口減少社会の到来

亀山市においては、昭和45年以降は人口増加が続き、特に平成12年以降はそのペースが加速しました。国が平成20年、県が平成21年にそれぞれ人口のピークを迎える中、亀山市では平成22年時点でも人口増加が続いていました。こうした人口増加傾向にあった平成17年と平成22年の国勢調査結果を基に社人研が算定した亀山市の将来推計人口においてすら、出生率の低迷などの要因から、平成32年をピークに総人口は減少に転じ、平成72年の人口は46,000人を割り込む予想となっています。

一方、平成27年の国勢調査における亀山市の総人口は50,254人と平成22年から769人減少するなど、予想を上回る速さで人口減少社会が進展していることから、早急な人口減少対策が必要な状況となっています。

図 年齢3区分別人口の推移(亀山市)



※ H27以降は社人研推計

◎暮らしやすく、心地よい都市環境の充実

今の亀山市には、JR 亀山駅・井田川駅・関駅といった交通拠点を中心に、暮らしに必要な都市機能が集積しています。これら都市機能と、交通利便性を生かした周辺市などとの機能連携により、市民生活を支えています。

また、市民や地域などが関わりながら保全してきた水と緑などの豊かな自然や、地域の特色ある歴史的なまちなみや景観などの魅力が、人々の暮らしに憩いや安らぎを与えています。

こうした機能と魅力が調和した暮らしやすく、心地よい都市環境を更に高めていくことが求められています。

◎誰もが住み慣れた地域で暮らし続けられるまちづくり

人口減少とともに一層の進展が予想される高齢化に対しては、単に介護や福祉の面だけでなく、医療・健康・生きがいつくり、住まい、交通や商業といった都市機能などを、包括的に考えていくことが必要です。医療・介護等のサービスの充実はもとより、高齢者や障がい者にとっても住みやすいコンパクトなまちづくりと交通ネットワークづくりを進めるとともに、身近な地域においては支え合いのしくみを形づくことで、だれもが住み慣れた地域で暮らし続けられる環境が求められています。

◎交通拠点性と都市活力の向上

亀山市は、古くから、鈴鹿関が置かれ、東海道の宿場、鉄道のまちとして、時代に応じた変化をしながら常に交通の要衝として成長してきました。この高い交通拠点性を基盤に、多様なものづくり産業が集積する内陸型工業都市として発展してきました。

今後も、交通拠点性の強みを生かした内陸型工業都市としての成長を図りつつ、観光や交流などの促進により、さらなる都市活力の向上が求められています。

◎子育てと魅力あふれる定住環境の充実

近年の亀山市は、県内をリードしてきた子育て支援と教育環境の充実などから、「子育てにやさしいまち」として知られています。また、古くからのまちなみとともに暮らすことのできる閑宿や、豊かな自然を身近に感じられる周辺地域など、移住交流を進めるための魅力が多くあります。

こうした魅力をもっと多くの人に知ってもらい、この地で暮らしたい人を増やすことで、移住交流を促進していくことが求められています。

◎地域の絆と市民の活力の充実

亀山市は、以前から市民活動が活発に展開されてきました。こうした活動の中で、新しい食文化の発掘や市民起点でのイベントなどが行われるとともに、市民と行政が一体となって「亀山市まちづくり基本条例」を作り上げ、市のまちづくりの基本的な考え方に基づくまちづくりが進められています。一方、地域活動についても、平成28年に市内の全地域に地域まちづくり協議会が設置されるとともに、「亀山市地域まちづくり協議会条例^{※1}」が施行され、住民自らが地域課題の解決に向けて取り組む体制が整えられてきています。

こうした市民・地域の活動する力は、今後のまちづくりを進める上で、欠かすことのできない力であり、これからも市民・地域との協働・連携の強化を進める必要があります。

※1 自分たちの暮らす地域を自分たちで創り上げるという理念及び民主的な運営の下に、地域課題の解決に取り組む自治組織である地域まちづくり協議会の活動の定着化及び活性化を図り、亀山市らしいまちの実現に資することを目的とした条例。

◎持続可能な行政経営

亀山市の財政状況は、液晶関連産業の集積により大きく成長しました。市税収入や財政規模は平成20年度にそのピークを迎えましたが、その後のリーマンショックの影響などから大きく減少し、近年は概ね維持の傾向となっています。この間、行財政改革に取り組むことで、市民サービスを低下させない効率的な行財政経営に努めてきました。

今後も、人口減少や少子高齢化の進展などから、税収減や社会保障関係経費等の増大が予想されることから、更なる行財政改革を推進し、持続可能な行財政経営に取り組んでいく必要があります。

図 亀山市の財政指数の推移

